

## 「沈む北斗七星(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

6月も中旬になり、時刻が遅くなると、天頂近くに見えた北斗七星も反時計回りにぐるっと回って、北西の空に見えるようになる。

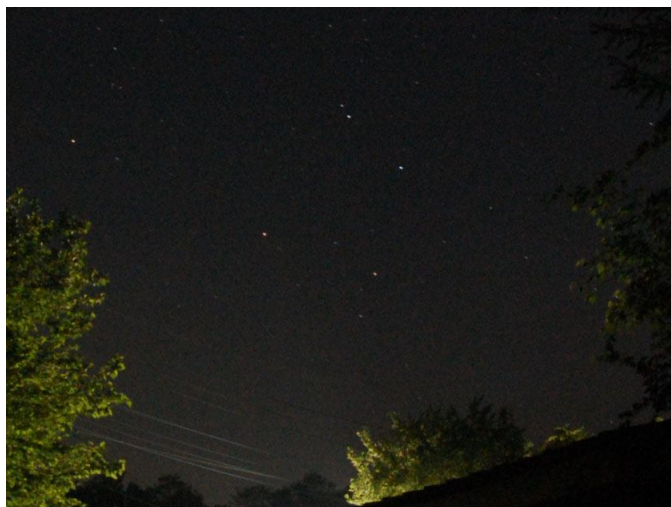


山荘の屋根の上の「沈む北斗七星」／北軽井沢

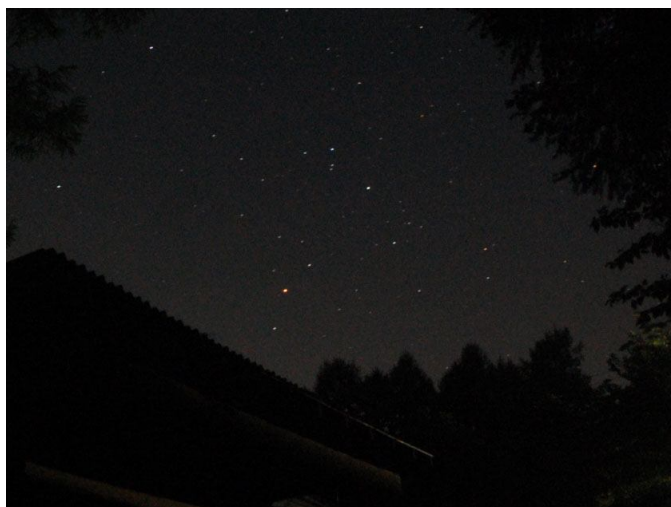


北斗七星は春の宵とちがって、柄を上完全に逆さまになっている。こういう北斗七星の姿はあまり馴染みがないが、夏から秋にかけての夜8時～10時に普通に見られる。上から4番目の恒星だけが3等星で、あとはすべて2等星という豪華な星の並びだ。上から2番目の恒星が「二重星」ということもよくわかる。

「沈む北斗七星」とは書いたが、実は関東地方(北緯 $35^\circ$ 付近)では、計算上北斗七星はギリギリで地平線下に沈まない。しかしそれは北の地平線に全く障害物がない場合である。たとえば、北側が見通しの良い海だったら、水平線ギリギリを横切る北斗七星の姿が見られるだろう。



時刻も遅かったので、春の星座も西に傾き始めていた。上の写真は春の星座の代表の一つ「からす座」である。ややいびつな台形だが、コンパクトで目立つので、すぐに見つけることができる。



南西の地平線近くには、早くも夏の星座の「さそり座」の頭が昇ってきた。オレンジ色の輝星は「さそりの心臓」アンタレスである。春と夏の星座、それに北天の星座を満喫できた宵だった。